待ちたい。

2　多目的礫器について

これまで一般的には凹石、磨石、擦石、敲石などという名称で呼ばれていた石器群に対して、1つの個体で複数の機能を有していたと考えられるものが多いことから、これらを多目的礫器とした。これまでは、例えば凹石に磨いたり、擦ったりした痕がある場合、これを凹石の転用ということで処理して来たことが多い。これに対して、ここでは1つの礫器が最初からいくつかの機能を持つものとして用いられたと考えたのである。そのいくつかの機能を考える場合、残された痕跡が、使用された（機能した）結果としての痕跡か、これから使用するために剝離あるいは成形された痕跡であるのかが問題となる。本石器にあっては、主に3種の痕跡を認めることができる。Ⓐ＝凹み、Ⓑ＝ゴツゴツあるいはボツボツした面、Ⓒ＝ツルツルした面である。この中には、例えばⒶ＝凹みの場合、ごく痕跡程度のものと、深いもの、その中間くらいのものとがあり、いずれも使用された結果として残った痕であると考えるのが、妥当である。このことは、Ⓑ、Ⓒでも同様である。それでは一体、これらⒶ、Ⓑ、Ⓒはどのような使用及び機能の結果生じたものであろうか。ここでは、その裏付けとなるような実験などは一斉行っておらず、その論拠が弱いという謗りはまぬがれないが、一応以下のように推論した。(註5) Ⓐ＝凹み→モノを敲いた痕と思われる。この凹みが形成される場合、1回の打撃だけで大きく剝れることはなく、それは直径1～3㎜、深さ1㎜弱程度のことが多いようで、このような打撃がほぼ同一の部分にくり返しくり返し行なわれた結果、大きな凹みができる。モノの特定はむづかしく否定的な実験データもあるが(註6)、クルミの尖った方を台石などの上で叩いたのではなかろうか。Ⓑ＝ゴツゴツあるいはボツボツした面→モノを台石（石皿）の上で潰した痕と思われる。上下両端の痕跡は若干異なるが(註7)、両側辺の平担に近い面は有擦痕打製石器の側面に見られる状態と非常に良く似ている。有擦痕打製石器の場合、両面から打ち欠かれた後に平担でボツボツした面が形成されたのに対し、多目的礫器では両面からの打ち欠き痕はなく、自然面が使用の結果このような面になったものと思われる。Ⓒ＝ツルツルの面→台石などの上でモノをスッた痕と思われる。

これらⒶ、Ⓑ、Ⓒの痕跡のできるような使用は恐らくは片手で握った状態での使用であろう。石器の大きさも片手で握ってちょうどしっくりする程度である。このように見てくると、これらⒶ、Ⓑ、Ⓒの痕跡はいずれも調理に関した一連の使用の結果生じたもののように思えてくる。そして、その対象となるモノは恐らくは堅果類ではあるまいか。使用痕だけからの推論ではあるが、現在までの段階ではこのように考えておきたい。

3　弥生時代の土壙について

ＳＫ06、02、2基の弥生時代の土壙が発見されている。両者は約90ｍ離れており、その東側を

除く周囲からは他の弥生時代の遺構、遺物は検出されなかった。２基の土壙は、その規模、土器の出土状況に差異はあるものの、平面形が円形で、それぞれ完形あるいはほぼ完形の土器が１個ずつ出土するという点では共通している。つまり、ＳＫ06は直径1.5ｍの円形を呈し、その中央部の埋土中から完形の甕形土器が横倒しの潰れた状態で出土した。またＳＫ02は、径約0.75ｍの円形で、北端部から（台付）鉢形土器が横倒しの形で出土した。両土壙は壁・底面とも明確ではあるが、踏みかためられたような堅さではなく、埋土は人為的に埋められた状況を呈している。このような弥生時代の土壙は、これまで県内では発見された例がない。青森県では宇鉄Ⅱ遺跡（註８）、垂柳遺跡（註９）、瀬野遺跡（註10）などに類似する土壙が見られる。しかしながら、それらの遺跡で発見されている土壙は、楕円形が主体である。宇鉄Ⅱ遺跡ではその中から土器の他、管玉、勾玉、小玉、石器などが出土し、ベニガラの分布も認められ、土壙墓として把えられている。本遺跡の土壙はどのような性格の遺構と考えるべきなのであろうか。確かに現在までのところ、人骨、ベニガラ、管玉等の副葬遺物などの検出はなく、墓とする要件は満たされていない。しかしながら、遺構の在り方、土器の出土状況などからして、これらＳＫ06、02二基の土壙は墓壙である可能性が強いとしておきたい。なお、土壙の時期は、その出土土器からＳＫ06は、中期後葉の田舎館式期の後半、ＳＫ02は二枚橋式～宇鉄Ⅱ式期前後と思われる。

４　弥生式土器について

遺跡のほぼ全域にわたって、大湯軽石層下の第４層暗褐色土から弥生時代の遺物が出土している。これらの土器は概観するに、弥生時代中期から後期に亙っているが、その量、器種ともに少なく、断片的なものである。ここでは、それらの器形、文様などから、おおよその時期を求めてみたい。

61図21、23、24は鉢形、あるいは台付鉢形土器である。突起状のゆるい波状口縁、無文の頸部、胴部上半の結節沈線文などから、中期前葉の砂沢式～二枚橋式期に属するものと思われる。

61図26、ＳＫ02出土土器、60図５～10は鉢形土器あるいは甕形土器である。口縁部に施された縦位の刻目、結節沈線文、波状工字文などから中期中葉の二枚橋式～宇鉄Ⅱ式期に入るものと思われる。

61図27、28、ＳＫ06出土土器、60図２、３は甕形土器である。胴部上半の肩部が明瞭でなく、口頸部が外反する器形、刺突列と鋸歯文のモチーフなどから中期後半の田舎館２・３群式期に相当するものであろう。

61図29、60図13～19は甕形土器あるいは壺形土器である。文様帯の上・下を限る交互刺突文、くずれた形の工字文、それに円形文、三角連撃文（註11）などから、基本的には後期の天王山系統の土器群と思われ、大きな意味での小坂式に入るものであろう。

61図30～32、62図33～51は口頸部がそれほど外反しない甕形土器、あるいは内傾して太くや